サロベツ遺跡

豊富遺跡の遠景

大場利夫

一

先史時代の人々は、自然物採集によって食生活を満たしているのが普通である。ことのほか自然環境に恵まれていた北海道の先住民族にとっての食生活は、なんの心配もないほど海幸、山幸に恵まれていたことと考えられる。先住民族が住居を設定する場所は、いうまでもなく食料を比較的容易に獲得できることが条件となるが、それに加えて真水がえられること、日当りが良いこと、丘陵上で水害をさけうるところ、といったところが選ばれる。現在、先住民族の遺跡が残存している場所に立って見ると、一応こうした条件が満されていることがわかる。われわれが別荘でもつくるとすれば、必ず選ばれるだろうと思う場所である。北海道の全域にわたって先住民族の遺跡の分布を調べてみても、その多くは内陸地帯ではなく、海岸線、河川に沿って残されているのも、こうした理由によるものである。

北海道の開発が本州に比べて遅れていたことが幸いし、太古のままの姿で遺跡が残り、地域によっては数百軒が同一地点に見られることも珍しくはない。その意味では北海道は遺跡の豊庫で、考古学者にとってはなんと幸せなことなのであろう。いつまでもこうした状態であって欲しいと願うのは、私だけではあるまい。

今日まで大方の研究者の目は、当然ながら大遺跡の存在する地域に向けられてきたので、その研究成果もまた道東部に傾いていたが、北海道の先史文化の全貌を知るためには必ずしも好ましいことではなく、遺跡が稀薄だといわれている日本海沿岸地域の探索もぜひ行わなければならない事態にあった。日本海沿岸で遺跡が発見されなかった理由は、遺跡の分布がすくないという先入観が主な理由になるが、そのほかでは日本海沿岸は海水の浸蝕で海岸線が次第に削られ、かつての遺跡が海没するか、またはこれに近い状態にあるので発見しにくい

こと、日本海沿岸は近年まで交通が不便なため、海岸線の探検がしにくかったことなどがあげられる。ことにサロベツ原野については、ここは湿地で内陸から海岸線への道は閉されていたという事情がある。

こうした中で昭和二十七年、当時、札幌西高等学校郷土研究部の生徒であった豊田英彦・近田正人の両君が、サロベツ原野の奥の豊富町豊里で竪穴遺跡を発見して試掘し、資料を河野広道博士の許に持参したのであるが、これがきっかけになってにわかに日本海沿岸地域、ことにサロベツ原野の遺跡が注目されはじめたのである。

二

私が豊富遺跡の調査を志したのは昭和三十年の年である。豊富集団開拓部落の農業指導者であった松川五郎氏が、開発事業の進展に伴って本地域の遺跡が破壊されることを気使い、早い機会に調査を行うべきことを書簡で強く私に要望されたのである。松川さんは大正年間に北海道大学農学部を出られた方で、卒業後満州開拓移民の幹部をなされ、終戦後満州で生き残った移民の方々と共に不毛のサロベツ原野に入地し、それらの人々の再起のために一家をあげて農業指導に当っておられた方である。松川さんの説得に動かされ私は現地を訪ね豊里地区の視察を行い、三十二年に改めて遺跡の調査を十日間行ったのである。

竪穴遺跡が存在している地点は、広大なサロベツ湿地帯と日本海砂丘とに狭まれた海岸寄りの細長い丘陵地帯で、その終端部に当りサロベツ川に対し舌状に突出した、標高わずか三〇mほどの小丘陵地帯である。ここには十数軒の竪穴が聚落をなして残っているが、私どもはその中の五軒について発掘を行ったのである。

竪穴の外見は直径五m前後の円形で、五〇mほどの凹みになっているので誰の目にもそれと気づくのである。調査の結果は全例擦文文化期のもので、発掘後の竪穴の実体は一辺の長さが六mほどで隅円矩形の輪郭を有し、壁面は九〇度に近い傾斜を有しており、竪穴内部の床の広さは二五平方mほどで粘土を敷いている。崩れ落ちていたが一壁面には粘土で固めた、長さ、幅、高さが各々五〇cmほどの竈があって、その奥に煙道がつくられ、地上に煙が排出されるようにつくられていた。竈とは別に床のほぼ中央には長径二〇cm前後の小範囲に赤変した土、すなわち炉址が見られる。おそらく竈は女性の調理の場であり同時に室内の暖房の使命を果たしたもので、炉は男性の座であったように考えられる。床面のほぼ中央部と四隅に直径二〇～三〇cmの柱穴が見られる。柱はいうまでもなく竪穴の屋根を支える基本になる骨組みであるが、丸木を床にさしこんだ跡が、年代を経て腐蝕し黒変しているので一目でわかるのである。竪穴の壁の一側には階段状の土盛りが施されていたが、ここは出入口に使われたところであろう。

豊里遺跡竪穴内部の状況

内部から発見した遺物は、土器、土製品、金属器それに炭化物などである。土器は素焼で専門語で擦文式と命名されているものである。主として深鉢、浅鉢の類であ

る。深鉢の高さは一五～二〇cm前後で、器面には整調痕である擦痕が顕著に残っているのが特徴なのでその名が生まれたのである。文様として刻線文を頸部や体部に交叉して施すものが多い。土製品は直径七cm前後の円盤形の紡錘車である。これはいうまでもなく糸を紬ぐ車で、中央の円孔に棒を挿しこみ糸を絡ませる道具である。また金属器は全例鉄製品であるが、土中で腐蝕の度合いが強く完形品はないが、推定四〇cm前後の長さの小刀、三〇cm前後と思われる刀子、長さ一〇cm、幅五cmほどの袋柄斧などで、竪穴の人々は利器は石器を使わずすでに鉄器を使用していたことが明らかである。なお前述した札幌西高の諸君は、先に本遺跡の試掘で毛抜形大刀一振、直刀四振、袋柄斧一ケ、魚突鉤などを発見している。また竪穴内部で火災があったらしく、炭化した繊維製品と農作物の種子と思われるものも発見している。

調査の結果から本遺跡の形成年代は、北海道の先史文化の中でも終末に近い、およそ十世紀前後の年代の擦文文化期のものでまだ竪穴生活を行い土器を使っているが、利器はすでに石器を捨てて鉄器を使用し、漁撈や狩猟を行うと同時に小規模ながら農作物の栽培を行って生活し、また糸を紬いで着物をつくっていた。といった生活の実態が判明し、十世紀前後の年代の先住民族の生活様式を明らかにすることができたのである。

豊里遺跡での調査の第一日は、電灯もない開拓村の日下部巳蔵さんのお宅に一泊させていただいたが、翌日からは当時、北海道開発庁技官・吉田恵治氏（現在・北海道開発局土木試験所第四研究部長）の厚意で一行の私と竹内淳二君（現在、釧路高専事務官）は、サロベツ泥炭地開発試験場内にお世話になり、食事は豊里保育所保母・松川安子さん（松川五郎氏令嬢、後に吉田恵治氏夫人）にお世話をいただいた。

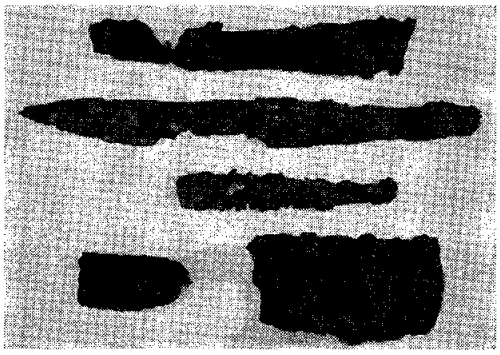
開拓村の人々は満州開拓集団移民として渡満し、戦争の惨禍に遭遇し妻子を失い、わずかに生き残って本国に引揚げながら、もともと農家の二男、三男で故郷にも戻れない立場で、新たな生活の活路を求めてこの地に入地した人達である。当時、農業には不適な不毛の地サロベツ湿原で困苦欠乏に堪えながら、ただ黙々と血の滲むような思いで開墾に打ちこんでいる部落の方々の姿を見て、私は人間の生きる姿の尊さをしみじみと感じたのであるが、それにも増して一家をあげて開拓地で農作物増収の指導に当っておられる慈父のような松川先生の輝いたお姿、作業の妨げにならぬよう幼い子供達を家毎に集めて、終日お守りをしてくれている慈母のような若い女性の優しい姿、その尊さにただ頭の下がる思いであった。人知れぬ場所で、人の知らない尊い仕事を何げなく行い、人にも知られず、そして知られようともしない、松川先生ご一家の真に人間的な魅力をしみじみと感じたのである。開拓村の人々も二十年を経た今日では、皆さん成功されたと聞いている。年賀状によると、子供さん方も成長して結婚したといった便りをもらい、当時を偲んで懐しく感慨一入である。

豊富遺跡の擦文式土器

三

豊里遺跡の南方に位置する幌延町の遺跡をはじめて視察したのは、昭和四十二年で

あったように思われる。ある日突然、北大農学部附属天塩演習林長の滝川貞夫氏が私の研究室を訪ねてこられた。お話しによると幌延町で町史を編集中で、同氏も編集委員をやっており、町史に古代史を入れたいので、ぜひ執筆して欲しいとのことである。私としてはまだ実見していない地域を視察することは大変有難いことなので早速承知し、同年、幌延町役場を訪ね、町史編集室の加藤良美氏の案内で下沼、下サロベツ、浜里を廻ることにした。考えていたように海岸からの路は、湿地帯に障げられて車では突破することができなかったので、充分な視察にはならなかったのが残念である。



豊富遺跡の鉄製品

本地の遺跡については試掘も行わなかったので、現状報告程度に留めたのであるが浜里小中学校所蔵の資料では、豊富遺跡と同様に擦文式土器が大多数を占めていた。しかしその他にオホーツク式土器も含まれていることを知り、本地にやって来た甲斐があったことを喜こんだのである。オホーツク式土器とは擦文文化期に、主として道東部オホーツク海沿岸部に盛行したオホーツク文化の人々が使用した土器である。したがって、本地帯にもオホーツク文化を所有した人々が居住していたことを示すものである。

浜里小中学校の教官の話しによれば、すでに三十九年に早稲田大学の桜井清彦教授が調査を行ったらしい。それを見学した教官によれば、浜里に存在する竪穴は輪郭は四角形をなし、一辺の長さが五m前後で、内部には遺物の包含がすくなかった。壁面の一側に窯がつくられており、出入口は海とは反対側にあった。と語っていることから推察すれば、この遺跡も擦文文化期に形成された竪穴であることは明らかである。

その後、四十五年に札幌大学の石附喜三男助教授が浜里地区を視察したが、同氏によれば海岸線に沿って延々六kmにわたって竪穴住居址が分布していることを確認している。おそらく本地域には擦文文化期の大規模な遺跡が存在しているものと思われるが、一見住みにくそうに見えるこの地に、どうして大規模な遺跡が残存しているのか理解しにくいことであるが、いずれの機会にかその真実の意義が解明されることになろう。

四

サロベツには私が見聞した豊富遺跡や幌延遺跡のほかにも、なお多くの遺跡が存在しているものと考えられる。豊富町豊里では私が調査した遺跡のほかに、海岸寄りの段丘上には一辺の長さ十数mで、深さも二m以上の非常の大型の竪穴遺構があることを見ており、今後の調査の次第では思いもよらぬ年代や系統の遺跡が発見されるかも知れないが、このことは将来の研究に待つよりほかにない。私の見聞の範囲では、サロベツには先史文化の中でも比較的年代の新しい擦文文化期に形成されたものが多く、アイヌ民族と直接関連のある年代の遺跡が主体を占めているように感じられた。

丘に登ると睨下には、広漠たるサロベツ原野と、荒涼たる日本海の波涛が展開される。かつて湿原に白鳥を追い、荒海に魚族を求めて活躍しただろう先住民族の、秘められたロマンの世界が心に映り、古代への郷愁を感ずるのであった。（札幌商科大学）